

# ココヘッドの記憶：オキナワン3世の意識と かたち

儀, ステファニー侑子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of  
graduate studies

(巻 / Volume)

73

(開始ページ / Start Page)

59

(終了ページ / End Page)

69

(発行年 / Year)

2014-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010185>

# ココヘッドの記憶

## —オキナワン3世の意識とかたち—

人文科学研究科 日本文学専攻  
国際日本学インスティテュート  
博士後期課程3年 儀 ステファニー侑子

### はじめに

戦前、ハワイへは様々な人種が移住した。中国人、ポルトガル人、韓国人、フィリピン人、日本人が代表的な移民である。1852年に中国人が移住を開始し、未開発の土地を開拓した。1884年までには約2万人の中国人が暮らしていた。そのような中で、ポルトガル人、韓国人、フィリピン人などが1800年代後半から1900年代前半にかけて、中国人同様、2万人弱の移民をハワイへ送った。しかし、中でも群を抜いて多かったのが、日本人移民であった。1890年頃、12,000人程だった日本人が、1900年までには6万人を超えていたのである。

一方で、沖縄の人々がハワイへ移住を始めたのは、それから約10年後の1900年のことであった。日本本土からのハワイへの移住は、1800年代半ばから始まっていたが、沖縄からの移住は1900年が最初だったのである。つまり、沖縄からの移民は「契約移民」としてではなく、「自由移民」としてハワイへ移住した、ということである。が、実際は「自由」ではなかった。以下は「自由移民」とは何かを示した引用文である。

自由移民というのはいつでも転職できる自由性を獲得しているという意味である。けれども沖縄移民は転職できるほどの資金的余裕がなかったので、プランテーションに留まらざるをえず、契約移民と実質的な差はなかった（鳥越、2013）。

沖縄からも最終的には、約2万人が移住した。他国からの移民労働者同様、彼らもまた、サトウキビ畑のプランテーションなどの仕事に就いた。プランテーションでの労働は午前4時に起床し、日が暮れるまで働き、安い賃金しか支払われない、というものであった。過酷な労働条件に加え、沖縄からの移民は、日本本土からの日本人からも差別を受けた。日本本土からの移民は、沖縄からの移民と包括的に「日本人」「日系人」と扱われることを拒んだのである。その理由に、琉球王国と日本との歴史上の関係が上げられる。

かつて琉球王国であった沖縄は、日本本土と幾つもの点で異なっていた。例えば、日本本土とは異なった言葉（沖縄方言）、異なった思想を持ち、異なった文化を持つ、という点である。これらは日本本土の人々からすれば、野蛮で低俗だとされた。このような違いを日本は受け入れるのではなく、日本に同化することを強制することにより、解決しようとした。

琉球王国が沖縄県になったことを機に、全てを日本様式に変えていこうと試みたことは、歴史上の事実である。方言札を使って、沖縄の言葉を禁じたこともそのひとつの例である。日本本土と沖縄との上下関係と差別意識は、ハワイへ移住しても続いたのである。

この上下関係と差別意識は、サトウキビ畑のプランテーションの構造に顕著に表れている。沖縄からの移民が、プランテーション労働に従事するようになる頃には、既に白人を筆頭とするピラミッド型の、階級制度のような構図が成立していた。日本人は沖縄からの移民が来る以前の時点で、最下層に属していたが、そこに沖縄からの移民が加わることによって、自分たちを沖縄からの移民よりも上位としたのである。このような差別意識は、他にも様々な場面で登場した。

沖縄からの移民は、ハワイでも方言で話すことが多かった。先述したように、日本は沖縄県の人々に対し、方言を使うことを禁止したことから、日本国内において、既に差別意識が高まっていたことは明白である。そのため、ハワイへ移住してからも、沖縄の方言は差別の対象となったのである。

その他に、刺青や養豚業、レストラン関連の職業などが、日本人（日系）の沖縄の人々に対する差別意識を増長させた<sup>1</sup>。例えば、沖縄の刺青はハジチと呼ばれ、女性の手の甲に彫られる伝統文化であった。しかしこれもまた日本によって禁止され、ハワイでも野蛮とされた。ハワイのオキナワン2世の女性の手に刺青が彫られることは、その後なかった。

養豚業も、沖縄とは深い関係があった。「豚」は沖縄の食文化に欠かせないものであるだけでなく、戦時中と戦後の沖縄を支援し、またオキナワンがプランテーションを去ることを可能にさせたものでもある。しかし日本人（日系）にとっては「オキナワ ケン ケン、ブタ カウ カウ」と沖縄の人々を卑下するものに過ぎなかった。

このような状況下で、沖縄からの移民が、自らを「オキナワン」あるいは「ウチナンチュ」と呼ぶようになり、日本本土からの「日系人移民」とは異なるアイデンティティ（意識）を持ち始めることは不思議ではない。

しかし「オキナワン」というアイデンティティが生まれた要因は、プランテーション内外の生活で味わった差別からだけではない。オキナワンは、労働で得た収入の一部を、沖縄に住む家族のもとへ送金していた。オキナワンであることを忘れないことで、苦境を乗り越え、後の県人会などの組織に、その思いが受け継がれていった。

こうして生まれたオキナワン・アイデンティティ（意識）は、2世、3世と、かたちを変えて受け継がれていく。2003年の世界のウチナンチュ会議のパネルディスカッションの中で、いったい誰がオキナワンなのか、という対話が話し合われた。名前、出身地、文化など、様々な点をお互いに投げかけるのだが、つまりこれは、人それぞれオキナワンであることへの意識が違う、ということと同時に、混血が進む中、誰がオキナワンなのか、という核心に迫る対話内容でもあるのである<sup>2</sup>。例えば、次のようなことである。

オキナワン2世は太平洋戦争を経験することで、アメリカ人になろうとする意識が高まる。つまり、オキナワンからアメリカ人へと、アイデンティティ・シフトを経験した。しかし彼らは、沖縄の文化の中で育ったため、オキナワンである意識も持っていた。一方、オキナワン3世はどうであろうか。

オキナワン3世は、完全なるアメリカ人として育った世代である。幼少期に沖縄の音楽や、祖父母の話す沖縄の方言を少し耳にした程度の記憶しかない。それは執筆者がインタビューをしたオキナワンから得た情報でもある。だが彼らの多くは、オキナワンであることへの意識も持ち続けている。アイデンティティ（意識）の変遷というのは、その人物が、どのような時代を生きたかによって変わるものである、と言えるが、沖縄のことをよく知らない世代がなぜ、オキナワンとしての意識を持っているのか。そこでオキナワン3世へインタビューを実施した。そこから、彼らが生まれ育った環境が、大きく影響していることが明らかとなった。

本論では、オーラルヒストリーとして、オキナワン3世の「オキナワン」というアイデンティティに対しての意識とかたちを考察していくこととする。オキナワン1世、2世、3世と、アイデンティティが移り変わっていった背景は先述したとおりである。ではなぜ、オキナワン・アイデンティティは消えなかったのか。その理由を、オキナワン3世で、ハワイ・オアフ島のハワイカイ（Hawaii Kai）で育った者を取り上げ、ハワイカイの当時の様子を描くことにより、明らかにしていく。

## 1 1900年からHUOA誕生までのオキナワジン

プランテーションというコミュニティ（生産共同体）が崩壊した後に構築されたコミュニティを見る前に、まず初めにオキナワン・アイデンティティがいかんして誕生したかを、プランテーションの時代からヒントを得たい。

ハワイはそもそも、独立したひとつの国であったことは言うまでもない。ハワイ王国は1898年に準州という立場としてアメリカ合衆国に併合されるまで、アメリカによる様々な政策に翻弄される。移民政策がそのひとつである。ハワイが準州となる前後、ハワイは多くの移民を受け入れた。そしてその多くが、サトウキビ畑のプランテーション労働者として雇われた。そのため、ハワイは多くの人種が混在する社会へと、急速に変化していったのである。多民族化が進み、人口も増加の一途を辿った。この様子に、ハオレらでさえ、その変貌に恐れを抱いた。「ハオレ」とは「白人」「よそ者」という意味のハワイ語で、プランテーション労働などの

歴史を語る時、たびたび白人を総称して呼ぶために用いられる。彼らは以下のことを懸念した。

下層労働者たちの連帯を最も恐れたハオレは「人種」概念を導入して分割統治を行い、支配体制を固めていく。つまり、先住民であるハワイアンや国籍の異なるチャイニーズ、ポルチュギース、ジャパニーズ、フィリピーノ、コリアン、プエルトリカンなどの本来「人種」的でない集団を一律に「人種」カテゴリーとして再定義し、白人至上主義に基づく「人種的優劣」や移住時期等の基準を用いて各集団を序列化することにより、「プランテーション・ピラミッド」と呼ばれるハオレを頂点とする階層社会を構築したのである<sup>3</sup>。

「人種」というカテゴリーを用いて統制を図ったわけだが、1900年に沖縄からの移民が加わることで、「人種」カテゴリーが変化した。結論から言えば、「民族」というカテゴリーが加わったわけである。

沖縄からの移民を、同じ「日本人」という人種カテゴリーに属することを嫌った日本本土からの日本人によって、沖縄からの移民は「沖縄人」という「民族」カテゴリーを与えられた。日本人として認められなかった、と置き換えることもできる。「二重のマイノリティ」としてのプランテーション内での位置は「二重の差別」も引き起こした<sup>4</sup>。しかし、この状況も太平洋戦争によって打開される。

沖縄県同様、ハワイの沖縄人たちは、日本へ同化することを試みていた。プランテーションの時代、その試みは更なる差別化へと導いてしまったが、太平洋戦争によってこの同化が好転する。日本人移民として、アメリカの労働に従事していた日本本土からの日本人はもとより、彼らから生まれた日系2世のこどもで、アメリカ国籍を有する者たちでさえ、アメリカの敵であるかのような扱いを受けるようになる。そのため「約半世紀にわたってオキナワ人を他者化してきた権力構造は無力化する一方、ナイチ人とオキナワ人がともに日本の要素の払拭とアメリカへの同化を急務とする立場におかれたことにより、初めて「対等」な関係とな」ったのである<sup>5</sup>。

戦後、ハワイの沖縄人は戦争で打撃を受けた沖縄県を多方面から支え、またハワイでは1951年にオキナワ・センター<sup>6</sup>を建設するなど、オキナワン・アイデンティティを再構築していった。オキナワンであることへの意識は「劣等感」から「誇り」へと変化したのである。今日見られるオキナワンであることへの意識は「誇り」に似ている。このことは「3. 受け継がれるアイデンティティ」で述べる。

また、劣等感から誇りへと意識を変えるきっかけともなった要因は他にも存在した。戦中と戦後、日本とハワイの両方のオキナワジンを支えたのが「豚」だったのである。

## 2 脱プランテーションと「豚」

過酷な労働条件に加え、安い賃金で雇われるプランテーション労働から抜け出すことを可能にしたのは、養豚業であった。養豚業は中国人によって始められた。そこに日本人（日系人）が加わり、その後、オキナワンが加わった。もともと「豚」に対して異なる意識を日本人（日系人）とオキナワンは持っていた。日本人（日系人）は豚（養豚業）を「汚い」「臭い」「醜い」<sup>7</sup>と感じており、多くの日本人が養豚業を一時的な職業と考えていた。一方でオキナワンは、豚を高級品として扱っており、それは琉球王国時代から続いている考え方である。「豚」に対する考え方はお互いに違えども、脱プランテーションの起爆剤になったのは確かである。以下はUchinanchu (1981) に示されているオアフ島の養豚業に携わった人種と人口の推移をまとめたものである。

1915年：日本人（日系人）73名	内訳	山口県	30名 (41%)
		熊本県	26名 (36%)
		広島県	13名 (18%)
		沖縄県	3名 (4%)
		福岡県	1名 (1%)

1923年：日本人（日系人）85名 内訳 沖縄県 24名（28%）  
 山口県 23名（27%）  
 熊本県 12名（14%）  
 広島県 12名（14%）  
 その他 14名（16%）

1930年：日本人（日系人）243名 内訳 沖縄県 119名（49%）  
 熊本県 34名（14%）  
 山口県 29名（12%）  
 広島県 22名（9%）  
 その他 39名（16%）

1940年：日本人（日系人）246名 内訳 沖縄県 153名（62%）  
 熊本県 28名（11%）  
 広島県 23名（9%）  
 山口県 22名（9%）  
 その他 29名（8%）

1955年：養豚業を営んでいた人口は226名で、内153名（68%）が沖縄県出身者であった

1955年から1962年：養豚業の人口が、若干減少する。しかし沖縄県出身者が人口の大半を占めた

1962年から1965年：沖縄県出身者、他県出身者、ともに減少を続ける。しかし、養豚業の総人口の42%を沖縄県出身者が占めた

1965年：沖縄県 78名 その他日本人（日系人）15名  
 中国人 20名  
 フィリピン人 37名  
 白色人種（ポルトガル人やプエルトリコ人）とその他 34名

1965年まで養豚業を営む者たちは減少し続けたが、その間もオキナワ系の養豚家たちの占める割合が一番多かった

以上の統計から、オキナワンが徐々に日系人に代わり養豚業に従事するようになっていったことが分かる。これはプランテーション労働から脱したことを意味する。さらに、新しいコミュニティが作られたということでもある。プランテーションに存在した人種・民族別の枠組みが、脱プランテーションすることで取り払われたのである。そして「養豚業＝オキナワン」のような時代が始まる。養豚業は幾つかの地域に集中するが、個人が経営するようになり、プランテーション時代とは全く異なったコミュニティが作られた。しかし、1950年代から養豚業に減少が見られるようになる。もともとこれらの土地は、主に借地であったからである。

統計で養豚業に減少が見られるようになった背景に、ホノルル市の都市再開発計画（1955年）があった。もともとカリヒ（Kalihi）などにオキナワ系の養豚家たちが集中していたのだが、1955年の計画に伴い、立ち退きとワイアナエ（Waianae）やココヘッド（Koko Head）などへの養豚場の移転を強制された。さらにハワイカイ（Hawaii Kai）の周辺を住宅街にする計画が持ち上がったことにより、1966年までにココヘッドの養豚業は閉鎖された。ココヘッドで養豚業を営んでいた者の中にはワイアナエに戻り、養豚業を続けた人々もいた。その他のオキナワンは職を変え、他の地域へ移り住んで行った<sup>8</sup>。

1915年から1965年頃まで、カリヒヤワイアナエ、ココヘッドには、プランテーション時代とは異なったコミュニティが確かに存在した。次章では、幼少期にココヘッドで育ったオキナワン3世を取り上げる。先述した内容の通り、彼女の両親（オキナワン2世）はココヘッドで養豚業を営んでおり、宅地開発により立ち退きを迫られるまで養豚家として生活をしていた。そして立ち退き後、両親は養豚業を辞め、子ども達（オキナワン3世）は、それぞれ別の道を歩んだ。彼女の証言からココヘッドの地域像を描くとともに、オキナワン・アイデンティティが受け継がれる理由を考察する。



図1 ハワイカイ (Hawaii Kai) 地図

### 3 受け継がれるオキナワン・アイデンティティ

オキナワン3世というと、戦時中もしくは戦後に生まれた世代である。彼らの多くはアメリカ人としてのアイデンティティ（意識）が第一にあり、次いで日系人とオキナワンとしてのアイデンティティ（意識）があると、これまでの執筆者によるインタビューから分かっている。1世がオキナワンというアイデンティティ（意識）を生み出した世代とするならば、2世はそれを受け継ぎ、アメリカ人としても認めてもらうために、第二次世界大戦で闘った世代である。この2世代間において、沖縄の言葉や文化などを継承していくことは、さほど難しいことではない。しかし3世にもなるとどうだろうか。サトウキビ畑などのプランテーションは衰退していき、一種のコミュニティは崩壊する。オキナワンは新たな地を求め、ハワイの島々へ、オアフ島のあらゆる場

所へ点在するようになる。このような現象が起こると、沖縄の言葉や文化の継承も難しくなる。となると、オキナワンとしての意識が薄れていくのではないかと仮説をたてた。

ハワイ・オアフ島の東部にハワイカイ (Hawaii Kai) という地域がある (図 1)。そこにはココヘッド (Koko Head) と呼ばれる地区があり、かつてそこは養豚業が栄えた地域であった。2章で述べたように、大規模な宅地開発により、現在は住宅地として整備されている。山の麓まで行くと、昔を感じることができそうな場所が現れる。しかし、その麓でさえ、昔とは全く違うようである。

フランシス・スエミ・スコット、旧姓ナカマ (以下：フランシス) は、1951 年生まれのオキナワン 3 世である。彼女は幼い頃、このココヘッドで育った。両親は養豚家であった。彼女の話によると、現在目にする姿は、昔のものとは程遠いと言っていた。2013 年に彼女に連れられ、ハワイカイ周辺をドライブした時、山の麓の辺りまで入って行った。道なりに沿って車を走らせて行くと、左手に小さな園芸店があり、右手にはかなり広い面積の農園が見えて来た。フランシスはその農園を見て、「○○さんの農園かしら？でも誰もいないわね。まだここに住んでいるのかな？」と呟いた。養豚場はひとつも無く、昔からこの地域に住んでいる人たちが今も暮らしているのかさえ不確かな状況となっていた。そこにかつて養豚場があったなど、想像もできない程、今は住宅が密集している。しかしここには確かに養豚場があり、様々な歴史をもった人々が住んでいたのである。

フランシスの両親は共にオキナワンである。母親のハルエ・ナカマ (旧姓：アラカキ) は 1913 年に、ハワイ島のホノカア (Honokaa) で生まれた。彼女はマカデミアナッツ農園を経営していた伯父夫婦のもとで育った。これまでの農園やプランテーションというのは、白人が経営者で日本人 (日系人) やオキナワンが雇われる、というのが常であったが、1913 年には既にオキナワンが農園を経営することが可能となっていたことが分かる。また彼女は十代をマカデミアナッツ農園で過ごし、その後、オアフ島のホノルルへ移住したことから、1913 年から 1930 年頃までの間、一部分のオキナワンが既にハワイ島では経営者としての地位を持てるようになっていたことが分かる。

一方で、フランシスの父親のイサム・ナカマは 1910 年生まれで、ハワイ島のヒロ (Hilo) で暮らしていた。サトウキビ畑のプランテーションの仕事をしていた。一人目の妻であるヨシコ・ナカマ (旧姓：シマブクロ) との間に 4 人の兄弟をもうけ、死別後、オアフ島ホノルルへ子ども達と移住した。ここでの最初の仕事はチャイナタウンにあった Wing Sing Wo という主にコーヒーを売買する店での配達などの仕事だった。1940 年代初め頃から 1950 年頃までのことである。終戦後、チャイナタウン全体の景気が悪くなったことなどを理由に、家族とともにココヘッド (Koko Head) へ生活の拠点を移した。そして 1951 年、ココヘッド (Koko Head) でフランシス・スエミ・ナカマが誕生する。

ココヘッド (Koko Head) でのナカマ家の家業は養豚であった。フランシスの両親と 5 人の兄と姉と一緒に彼女は育った。

2013 年、フランシスに 2 度目のインタビューをお願いした時、ココヘッドを案内してくれた。ルナリロホームロード (Lunalilo Home Road) を出発し、ハワイカイ周辺を数時間、昔の記憶を辿りながら車でドライブした。彼女は時々この辺りをドライブすると言っていた。昔の思い出の場所に来るのが楽しみということだけでなく、ここでオキナワンとしての意識が芽生えたようである。ここからはフランシス本人が描いてくれた地図をもとに、当時ここにどのような人々が暮らしていたのかを見るとともに、オキナワンとしての意識が芽生えた要因を考察していく。

まずカラウラナオレ・ハイウェイ (Kalaulanaole Hwy.) を抜けると、ルナリロホームロード (Lunalilo Home Road) という道路に出る。この道沿いに住んでいた人たちは主にバラや野菜といった農園を営んでいた。例えば、イゲという人物がカーネーション・ファームという農園を営み、オカベという人物がバラ園を営んでいた。ヒガという姓の家族はレタス畑を持っており、その他に、カミヤ、タキグチ、オクハラ の 3 世帯も暮らしていた。かき氷屋やサービス・ステーション、小さな食料品店、ルナリロ・ホームと呼ばれていた老人ホーム、そして日本語学校もあった。

次にカイアマロード (Kaiama Road) とカイワロード (Kaiwa Road) 周辺にはシマブク養豚場、タテイラ・ジャンクヤード (くず物集散所)、カネシロ養豚場、トヤマ野菜農園、シマブクロ養豚場、そしてニイ・ナー

サリーがあった。その他、ズケランという姓の家族、ガキヤ家、シロマ家、シンセト家、ヒガ家、アセト家、カネシロ家などが暮らしていた。ルナリロホームロード (Lunalilo Home Road) 一帯とカイアマロード (Kaiama Road) とカイワロード (Kaiwa Road) の一帯を遮るように、クアパ池 (Kuapa Pond) が存在した。その上を道が通り、橋を渡るとフランススが暮らしていた地域に辿り着く。

カミロヌイロード (Kamilonui Road) に面して、ナカマ養豚場 (フランススの家族)、イシカワ酪農場、タマシロ家、マエド家が暮らしていた。以上がフランススの暮らしていた頃の地域の住人と職業である。彼女曰く、一軒一軒の家が離れていて、広範囲で豚を放し飼いにできたと言う。

ルナリロホームロード (Lunalilo Home Road) 沿いで暮らしていた親戚の家までは、よく自転車に乗って通ったようである。ここでの暮らしをフランススは次のように話してくれた。

生まれた時からカイザーが開発を始めるまで、ずっとココヘッドで育った。住民の大半が農園や養豚で生計を立てていた。わたしは家の近くにあった池でオタマジャクシを捕まえたり、近所の子ども達と遊んだりした。学校にも行った。小学生の頃は日本語学校にも行った。小学校に行くためにはルナリロホームロード (Lunalilo Home Road) まで歩いて、そこからバスに乗った。池の反対側にはシマブクロ家があって、そこに姉が嫁いだから、帰りはそこに寄ったりもした。それからルナリロホームロード (Lunalilo Home Road) に親戚のスマダ家が暮らしていたから、学校帰りによく遊びに行った。スマダは母方の伯父の姓で、名前はセオドル・スマダ (Theodore Sumida) というが、みんなからは“Uncle Ted”と呼ばれていた。奥さんはステラ・ハルコ・スマダ (旧姓:ヒガ)。“Aunty Stella”と言ってお母さんのように接してくれた。私の母親は、私が描いた絵を例えば学校から持ち帰ったら、何も言わずに捨ててしまうような人だったけれど、Aunty Stella はその絵を褒めてくれて、自分の息子の絵と一緒に自宅の冷蔵庫に貼ってくれた。今思い返すと、私の両親も養豚業で忙しかったけれど、スマダ家も野菜の栽培などで忙しかったに違いないと思う。

フランススは両親の養豚業についても語ってくれた。彼女は末っ子であったこともあり、見ていることの方が多かったようであるが、父親や兄弟の仕事が大変厳しいものであったという。

豚の世話は朝早く、4時から始まった。まず餌を作るところから始まるのだが、その材料となるのは、レストランなどの残飯だったため、それを買いに行くところから始まる。私の兄と、Aunty Stella の長男・ジョージがある日トラックに乗って、レストランへ集めに行ったことを覚えている。ジョージは自分の家の畑仕事を手伝うより、残飯を買いに行って豚の餌を作った方が楽だと言っていたけれど、私たちはジョージの仕事の方が楽だと思った。

と笑いながら冗談も。

それで、その残飯を煮詰めて豚に与えた。豚の数が多かったから、餌の量も半端じゃない。匂いは臭く、酷かった。豚に餌をやっていると、豚を買いにお客さんが来る。生きたまま買っていく客もいれば、父親に処理を頼む客もいた。中国人やオキナワンが買いに来ることが多かったが、特に伝統行事がある時は、大勢の人が買いに来ていた。父親が豚を食肉処理するところも見ることがあった。でも不思議なことに何も思わなかった。仕事は大変だったけれど、当時ほどの家族も同じように苦労していた。

「誰もが苦労をしていた。」しかしその「苦労」はプランテーション時代にあった差別からくる「苦悩」ではなくなっていた。みな同じような境遇の中で暮らしており、日系人とオキナワンとの間の差別意識も薄れていた。それは図2からも見て取れる。もともと日系人が主であった養豚業をオキナワンが取って代わり、開発が進み、養豚業が閉鎖されると、その後継に受け継いだのがフィリピン人などであった。

図2はフランススが幼少期に暮らしていた周辺地図である。本人の手書きの地図をもとに作成した。



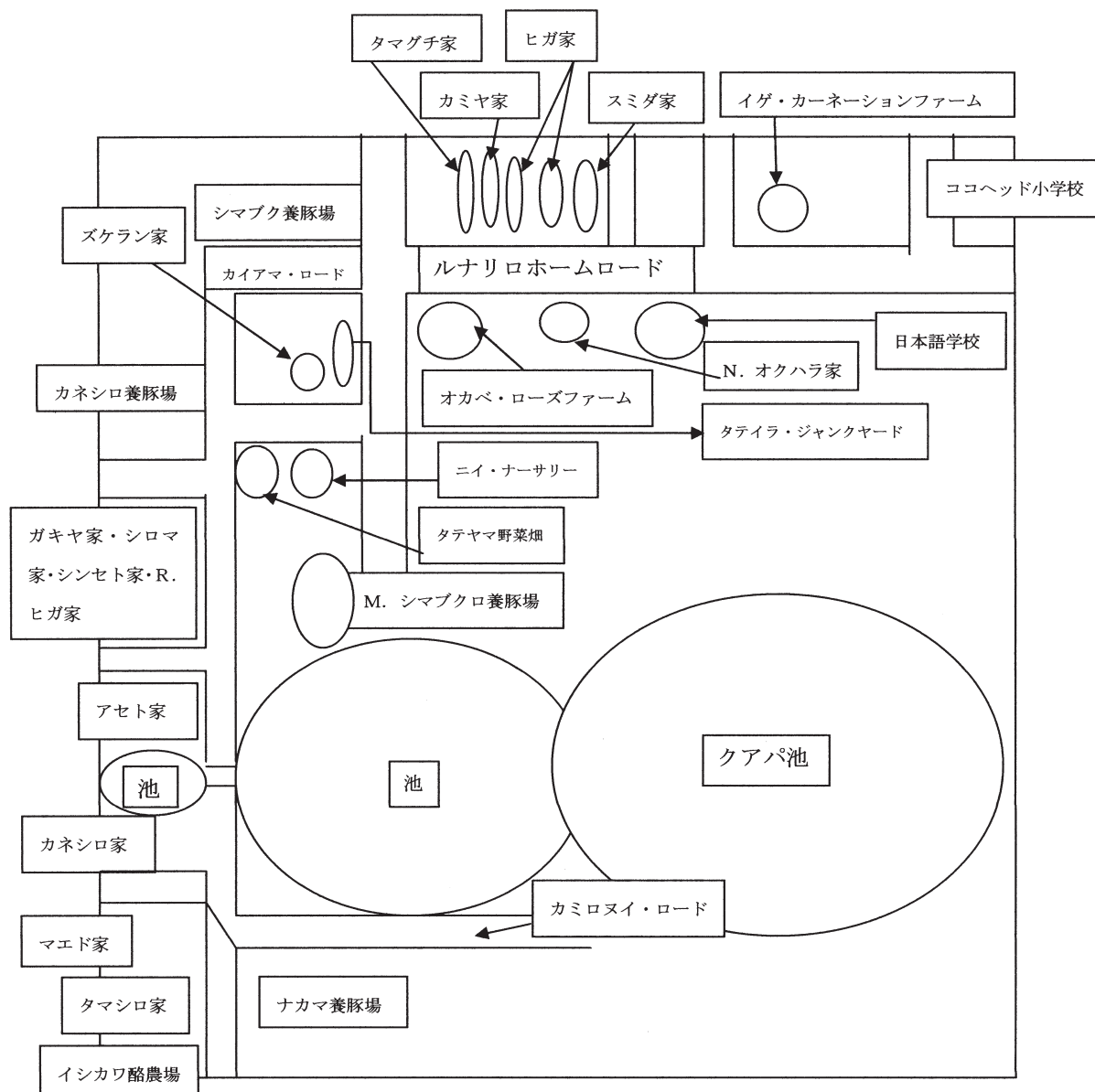


図2 ココヘッド周辺地図

ここでもう一度、2003年の世界のウチナンチュ会議のパネルディスカッション<sup>9</sup>の内容をみる。

マコト： こんにちは！私はアラカキ・マコトと言います。

ウェスリー：あなたはウチナンチュですか？

マコト： あなたの名前は？

ウェスリー：私の名前はウェスリー・ウエウンテンです。私もウチナンチュです！

マコト： 「ウエウンテン」はオキナワンですが、「ウェスリー」？それはオキナワンの名前ではありません。あなたは本当のオキナワンではありません！

ウェスリー：では、アメリカ人の名前をもっていることは、私はウチナンチュではないということですか？私はウチナンチュですよ！私の祖母は沖縄から来ました。そして、わしは三線を弾きます。あなたは三線を弾きますか？

- マコト： いいえ、私は三線を弾きません。
- ウェスリー：それなら、あなたは本当のウチナンチュではありませんよ。あなたは沖縄の文化を何一つ知らないではありませんか。私はあなたよりウチナンチュです！
- マコト： 三線を弾けなければ、ウチナンチュではないのですか？あなたは美浜に行ったことがないのではありませんか。
- ウェスリー：ウチナンチュであるためには全ての町の名を知らなくてはならないのですか？美浜のことは聞いたことがあります。「アメリカン・ビレッジ」と呼ばれている場所ですよ？そこは本当のウチナーではありませんよ。あなたは頻繁にアメリカのファーストフードを食べるのでは。私は違います！私はアシティピチを食べて育ちました！私はあなたよりウチナンチュです！
- マコト： 私はアシティピチが嫌いです。沖縄の全ての料理が好きでなければウチナンチュではないのですか？実は私は沖縄に住んでいるのです。法的にも私はウチナンチュです。私はあなたよりウチナンチュです！
- ウェスリー：ウチナンチュであるためには、沖縄に住んでいないといけないのですか？私の先祖は佐敷と安波郡から来ました。あなたの先祖はどこから来ましたか？
- マコト： 私の父は首里からですが、母は石垣からです。
- ウェスリー：え？？石垣？？それは本当のウチナーではありません！あなたは半分しか沖縄の血が入っていない。私は完全なウチナンチュです。私はあなたよりウチナンチュです！
- マコト： 血筋があなたをオキナワンにするのですか？
- ウェスリー：うーん、分かりません。あなたはどう思いますか？

(執筆者訳)

登場人物2人は、ともに自らをウチナンチュと思って会話を始めている。しかし話し合いをする過程で、誰がオキナワンであるのかが分からなくなっていく様を描いている。これは現在のハワイのオキナワンにも照らし合わせることができるのではないか。では、この会話に出てきた点をひとつひとつフランスに照らし合わせていこう。

名前はフランス・スエミ・スコット。旧姓はナカマである。「フランス」はアメリカの名前で、「ナカマ」は沖縄の名前である。祖父母は沖縄から来た。三線は弾けない。沖縄県の地名は分からないが、最近たびたび沖縄県を訪れ、親戚と交流を深めている。住まいはオアフ島である。沖縄の料理、日本の料理、ハワイの料理、アメリカの料理を食べて育った。両親ともにオキナワンであるので、「完全なウチナンチュ」である。

フランスは自分をオキナワンであると言う。正確には、第一にはアメリカ人であるという意識があり、第二にオキナワンである意識がある。その要因に、彼女の育った環境が影響しているようだ。

両親は共にオキナワンであることから、フランスは幼少期から正月のパーティーやピクニックに参加していた。ピクニックとは、沖縄の同じ出身地の者同士がクラブをつくり、多数の家族が集まり、音楽を奏でたり、子どもたちは下駄を使って競争をしたり、世代間を超えて交流する場である。例えば次のような催しがあった。

A little later, ten Issei women paired into couples begin their race. Each couple has one of their feet in a double geta and one foot free. In a manner similar to a three-legged race, the women move as fast as they can to outdistance their opponents (Ogawa, 1978).

このように下駄を使った競争は多くのクラブでも楽まれた他、生卵が割れないように走り、順位を競い合う競技や、米の袋に入って飛び跳ねながらゴールを目指す競技など、クラブのイベントを盛り上げる為に様々な種目が用意されていた。今日ではピクニックを開催するクラブも少なくなったが、規模を小さくして存在するクラブもある。フランスは幼い頃は父方のクラブが開催するピクニックに行っていた。フランスの母親がクラブに属するようになったのは、だいぶ後になってからだと言う。ピクニックでは、沖縄の音楽が流れたり、

三線を弾いたりした。食べ物は沖縄の料理や日本の料理など、様々な国の料理が混在する、「ハワイの料理」が並ぶ。また毎年、正月に家族が集うことも、フランスの記憶に鮮明に残されている。その当時の様子をフランスはインタビューでこのように語る。

昔は私の両親の家に皆が集まったの。大晦日の昼間から、親戚・家族がやって来たわ。私の兄弟の中にはまだ結婚していないのもいたから、両親の家に皆が来たわ。たくさんの料理を作ったわ。その時はそれぞれが料理を持ち寄ったりもした。なぜなら、当時は一軒一軒、親戚の家を回ったから。私の両親の家にも親戚が手料理を持って来たり、私たちも親戚の家を何軒も訪れた。だからたくさんの料理が必要だった。でもこの習慣も、古い世代、私の両親とか、がいなくなるにつれ、個人で正月を祝うようになっていったわ。でも私の兄弟はまだこの習慣を続けている。毎年誰がどの料理を作って持って行くかを決めて、兄弟とその家族が集まって正月を祝う。餅、ポテトサラダ、盛り物などを作って持ち寄るの。

この「餅、ポテトサラダ、盛り物」は祝い事の時などにハワイでよく見られる品々である。そして日本料理やアメリカの料理、沖縄の料理などがミックスされたメニューは、移民の歴史と深く関係するものである。彼女のオキナワンであるという意識を、この料理から導き出すことは困難であるが、ピクニックなどといった幼い頃に培われたものは、彼女の意識に影響している。成長の過程で、フランスは養豚業に触れ、ピクニックに触れ、正月、お盆といった伝統行事にも触れた。その中でもフランスにとって、オキナワンであるという意識に結びつくものは、音楽であることがインタビューを通して感じられた。ピクニックや正月の時は、沖縄の音楽が流れ、普段は両親の奏でる三線と琴の音色があった。沖縄の独特の音色が彼女と沖縄を繋げているのであろうか。そんな中、インタビュー中に興味深いことを述べた。

それは「沖縄には行ったことがあるか」という質問に対しての返答であった。彼女は最近になって、度々、親戚・家族と沖縄を訪れるようになった。目的は旅行と沖縄に住んでいる親戚に会うためである。これまで行き来しなかった親戚に会いに行った初めての沖縄への旅で、彼女はこう感じた。「やっと戻って来たようだ」と。

## おわりに

ハワイへは長きに亘って様々な人種が移住した。その中に、日系人と呼ばれる人種がいた。そして彼らは、日本本土からの日本人と、沖縄からの沖縄人と、ふたつの民族に分けられた。前者を上位に、差別意識が存在した。これはハワイへ移住する前、すなわち日本で既に存在した意識であるが、移住先でもそれは続いた。プランテーションでは、既に最下層に位置していた日本人のさらに下に沖縄人が位置し、そのような中で沖縄人は自らをオキナワンとして、過酷な労働と差別に耐えた。劣等感から生まれた「オキナワン」という意識は、やがて、その「かたち」を変えていった。

「3. 受け継がれるオキナワン・アイデンティティ」の中で、プランテーションのような一種のコミュニティに属さなくなると、オキナワンとして意識が薄れていくのではないか、という仮説をたてた。そして、それを探るべく、オキナワン3世を取り上げ、その答えに辿りつこうとした。結果、オキナワンであることへの意識は薄れていない、と言える。しかし「かたち」は変わった。「劣等感」から「誇り」へと「かたち」を変えたと言える。それはフランスの「やっと戻って来た」という言葉にも表れている。

フランスは幼い頃から沖縄の食べ物や音楽などの文化に触れて育った。また母親から沖縄の実家の写真や家族の写真を見せられて育ったため、いつかは沖縄を訪れてみたいと思っていた。そして年を重ね、ようやく沖縄を訪れることができた時、母親の実家を訪ねた。昔、写真で見た風景が目飛び込んできた。その時「やっと戻って来た」と思ったそうである。彼女の目には涙が溢れていた。沖縄を知らないからこそ、沖縄のことや先祖の生まれ育った場所を知りたいという欲求が、オキナワンであることへの意識をより強めていったのではないだろうか。

またフランスは毎年、オキナワン・フェスティバルにボランティアとして参加している。これもまた彼女のオキナワンとしての意識の表れであろう。白水繁彦はハワイの沖縄県人会の活動を「一種の民族文化運動」

だと考え、「ウチナンチュ・ムーブメント」と呼んでいる（白水、1998）。彼は「ウチナンチュすなわち「沖縄の人」として、まずは「ウチナンチュ・スピリット」（沖縄のこころ）を身につけようと言うこと」であると説明している（白水、1998）。フランスのように自らをオキナワン・フェスティバルのような場に身を置くことで、「知らない」ものに対して知ろうとする気持ちが、オキナワンであるということへの意識に繋がっているのではないかと考えることができる。

インタビューをこれまで十数名に対して行ってきた。そしてその多くがオキナワンであることを意識していた。2世は生まれながらにしてオキナワンであり、3世は「知らない」からこそ「知りたい」という理由から生まれるオキナワン・アイデンティティをもっている。プランテーションという一種のコミュニティが消えるとともに、団結していたオキナワン・コミュニティがなくなり、人種・民族が混在したココヘッドなどのコミュニティがつくられた。ひとつの場所にオキナワンが集中することがなくなってからも、家庭という小さなコミュニティでオキナワン・アイデンティティは受け継がれ、消えることはなかった。「かたち」は違うが、そこには確かにオキナワン・アイデンティティが強く受け継がれていた。

<sup>1</sup> Uchinanchu (1981: 127 – 139)。

<sup>2</sup> Uchinaanchu Diaspora (2007:197 – 198)。

<sup>3</sup> 岡野 (2011: 125)。

<sup>4</sup> 岡野 (2011: 128 – 129)。

<sup>5</sup> 岡野 (2011: 130)。

<sup>6</sup> ハワイ沖縄連合会として1951年にHawaii United Okinawa Association (以下HUOA)を立ち上げる。現在は、沖縄に関連する様々な行事を主催するなど、沖縄の歴史や文化を伝える重要な存在である。毎年開催されるオキナワン・フェスティバルも、HUOA主催である。<http://www.huoa.org/nuuzi/index.html>

<sup>7</sup> Uchinanchu (1981: 219)。

<sup>8</sup> Uchinanchu (1981: 221 – 222)。

<sup>9</sup> Uchinaanchu Diaspora (2007:197 – 198)。

## 引用・参考文献

- Ogawa, Dennis M.. *Jan Ken Po: The World of Hawaii's Japanese Americans*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1978. Print.
- Uchinanchu: A History of Okinawans in Hawaii*. 1st ed. Ethnic Studies Oral History Project, United Okinawan Association of Hawaii, University of Hawai'i, 1981. Print.
- Uchinaanchu Diaspora: Memories, Continuities, and Constructions*. 42. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2007. Print.
- 岡野宣勝 2011 「二重のマイノリティからマイノリティへ—ハワイ沖縄系移民史にみる社会的カテゴリーの変遷—」『日本移民学会 創設20周年記念論文集 移民研究と多文化共生』（御茶の水書房）。
- 白水繁彦 1998 『エスニック文化の社会学 コミュニティ・リーダー・メディア』（日本評論社）。
- 鳥越皓之 2013 『琉球国の滅亡とハワイ移民』（吉川弘文館）。

## 地図引用元

- “Hawaii Kai Neighborhood Board, Official Web Site for The City and County of Honolulu.” *Hawaii Kai Neighborhood Board, Official Web Site for The City and County of Honolulu*. N.p., n.d. Web. 20 May 2014.  
<<http://www1.honolulu.gov/nco/maps/nbm1.htm>>.
- “Highways.” *Department of Transportation*. N.p., n.d. Web. 20 May 2014.  
<<http://hidot.hawaii.gov/highways/home/oahu/oahu-state-roads-and-highways/>>.

## インタビュー

ハワイ・オアフ島 2012年9月、2013年2月、7月に実施した内容から抜粋。

